＜本の紹介＞

『戦中戦後・母子の記録』

（全１０巻、笠原政江編集、自家本）

松岡 勲

表題の本は、1978～1980年に京都市山科に住む笠原政江さんを中心に編集発行された全10巻の自家本（非売品）である。第６巻よりは朝日新聞社事業開発本部が編集に参加している。

当時、各地の図書館に寄贈されていて、私は第１巻を茨木市（大阪府）の図書館で、第２巻を大阪府立図書館で借りて読んだ。全巻見るためには、国会図書館デジタルコレクションで読むことができる。

第１巻を読んで、満州や朝鮮からの引揚の体験記、夫を戦争で亡くした妻の苦労や思い、あるいは父が戦死した子どもの思い等、私自身、父が戦死しているので、大変感銘深かった。（なお第１巻には当時図書館員が挟み込みで貼り付けた「やましな月報」があり、当時の女性たちの熱気が感じられた。一部分参考に本稿末に載せておく。）

第２巻は大阪府立図書館にあり、取り寄せた。第１巻よりさらに充実した手記の連続であり、胸を打たれた。（特に前半が粒ぞろいの力作だった）読みながら「これは保存したい。」と考える手記をメモした。あまりにもすばらしい記録なので、結局古書で購入した。第３巻以降は国立国会図書館デジタルコレクションで読むつもりだ。

『戦中戦後・母子の記録』（全１０巻、笠原政江編集、自家本）

第１巻「怒涛の母」昭和53年２月11日
　　編集委員：松美子／越山田鶴子　　巻頭：大西良慶　　発行者：笠原政江

第２巻「我が子に遺す」昭和53年８月15日
　　編集委員：松美子／越山田鶴子　　巻頭：瀬戸内寂聴　発行者：笠原政江

第３巻「限りなき力」昭和54年３月14日
　　編集委員：松美子／越山田鶴子　　巻頭：山田無文　　発行者：笠原政江

第４巻「母の歩み」昭和54年６月20日
　　編集委員：松美子／越山田鶴子　　巻頭：澤地久枝　　発行者：笠原政江

第５巻「女たちも戦った」昭和55年７月31日
　　編集委員：松美子／越山田鶴子　　巻頭：中村メイコ　発行者：笠原政江

第6巻「生きぬいて」昭和54年2月28日
編集者：朝日新聞社事業開発本部　巻頭：藤原てい　発行者：笠原政江

第7巻「偉大なる母」昭和54年3月30日
編集者：朝日新聞社事業開発本部　巻頭：三枝佐枝子　発行者：笠原政江

第8巻「若き日の母」昭和54年7月15日
編集者：朝日新聞社事業開発本部　巻頭：高峰秀子　発行者：笠原政江

第9巻「戦火の中を生きる」昭和54年10月1日
編集者：朝日新聞社事業開発本部　巻頭　佐多稲子　発行者：笠原政江

第10巻「されど母は強し」昭和55年4月20日
編集者：朝日新聞社事業開発本部　巻頭　松下幸之助　発行者：笠原政江

（方正の会事務局注：本書は、国会図書館デジタルコレクションの他、昭和館デジタルアーカイブ（東京都千代田区）でも全巻閲覧が可能と思われる。また、各巻ごとの所蔵図書館は、国立情報学研究所の「CiNii」にて調べることができる：
https://ci.nii.ac.jp/ncid/BN07192313）

（まつおか・いさお：1945年3月生まれ。父は中国の武漢近郊で戦死。大阪府東大阪市と高槻市と小学校教員・中学校教員後、退職。現在も広島に関心を持っている。父親の靖国合祀には反対である）

※ 次頁に、第1巻に当時図書館員が挟み込みで貼り付けた「やましな月報」を添付

やましな月報

創刊号
発行者
笠原政江
京都市山科区大宅
岩屋敷二番地
郵便番号607
電話（075）
571－5266

朝日新聞紙上で大きな話題を呼びました

十月三十日掲載

「戦争の悲劇を再び繰り返さないために、戦時下の無名の女性たちの体験を若い世代に伝えたい。」こんな願いを込めて、女性ばかりの手になる戦争体験記の刊行運動がこのほど、京都市でスタートした。提唱者は同市の女性旅館主だが、全国の女性から戦争体験をつづった手記を募り、集まった手記を残らず自家製本にまとめ、全国の図書館などに寄贈するという壮図だ。刊行にかかる一切の費用は、女性旅館主が私財を投じて負担するが、いまのところ、百千万円を用意しており、来年一月早々には第一巻が刊行される見通しだ。

同じ体験をもつ同世代の女性と心ゆくまで当時のことを話し合ってみたいという気持ちも強く、「戦時下の悲しみ、怒き、苦しみを思いのたけ書いてほしい。」とこの計画を新聞に広告の形で載せたところ、北海道から九州までの約四十人から手記が届いた。中国東北部（旧満州）やサハリンからの引き揚げの模様をつづったものが多い。また、戦時下の食品の値段や米の配給量を書きつらねて当時の食生活を紹介するなど、台所からみた戦争といった感じのものもある。「わたしの戦争体験を孫に書き残したいと思っていたのでいいちょうどいい機会だと筆をとった。」などと書き添えた手記が多い。

全国から寄せられた手記をみる笠原政江（左）＝京都市東山区の旅館で

若い世代に残そう
女性戦争体験記

私の念願として今後続けたい気持ですのでご賛同の方はどしどしご投稿下さい　四〇〇字詰　三十枚

初顔合せを終えて

十月三十九日（土）、当日は朝途を祝福するかの様な晴天に恵まれ、北は北海道から南は九州迄遠路お集りいただき数に有難うございました。当日は何かと行き届かぬ事もあったかと存じますが始めてお会いする皆様方が自然に打ちとけていただき何か昔からのお知り合い、旧友の様な集りになり本当に嬉しい事でした。これも矢張り同じ時期、形は違えど共、共に苦労してきた皆同志、お話を交えていても通じるという事でございましょう。

設定会長様の有意義なお話、会員の自己紹介、に続いて出版するにあたっての現在迄の経過状況、会の名前も各自よりアンケートをとり、秋桜会（コスモス）、つりがね会、美笠会、たちばな会、京政会等々数多く立派な名称をいただきましたが、醍醐三宝院、勧修寺、等由緒ある山科の里に於て発足した事から醍醐桜様よりいただきました〃やましな会〃により多くの拍手を得て決定致しました。

懇談会では各地のお国自慢の声も弾み、山の端より出ずる月もやましな会を迎え明るく輝くかの様に煌々と冴えわたり午後七時三十分、盛会の裡におひらきとなりました。

ご遠方の方々十五名お泊りいただき翌三十日は市内及び嵯山を散策し、京の湯どうふの名物鳥〃嵯峨野〃にて昼食、午後三時京都駅にて解散。本当に和気合々の笑顔が何時迄も脳裏に刻みこまれ三三五五帰途につきました。